

《動向・紹介》

## 難民一族の「桎梏」と「訣別」 ——プロイセン・ユグノーの史劇『ロラン家』を観る——

林 祐一郎

筆者の手元に、1つのDVDボックスがある。『ロラン家——ベルリンのあるユグノー一族の歴史—— *Die Laurents. Geschichte einer Berliner Hugenottenfamilie*』と題するその表紙には、同作に登場する夫婦が物憂げに肩を寄せ合う場面が描かれている。ユグノーとは、近世のフランスで迫害されていた改革派信徒のことであり、彼らの一部は信仰の自由やより良い生活条件を求め、ナント勅令が撤回された1685年以後には大挙してプロテスタント諸国へ亡命した。ブランデンブルク選帝侯国の首都だったベルリンにも、ポツダム勅令の発布を契機に、多くのユグノーたちが受け入れられた。彼らは、現地住民からの反感や自己認識の動揺を経験しながら、最終的には亡命先へ「統合」された、と言われている。亡命先に上手く順応し、かつ社会の様々な発展に寄与したとされる彼らが、後世の移民国家ドイツの映像作品の中で、どのように描かれているのかを紹介することは、決して無意味ではないだろう。

もっとも、本作はウーヴェ・オットーによる小説『ロラン家——ベルリンのあるユグノー一族の物語——』を原作としている<sup>1</sup>。しかし、映像版は小説が刊行されてから1年も経たないうちに放送されたため、本作は最初から映像化を前提としたものだったと考えられる。かくして『ロラン家』は、当時西ドイツの公共放送局「第一ドイツ放送 *Erstes Deutsches Fernsehen*」（通称：第一 *Das Erste*）で、1981年10月27日から全10話の連続テレビドラマとして放映された。筆者が参照したのは、2007年に同局系列の「ベルリン＝ブランデンブルク放送局 *Rundfunk Berlin-Brandenburg*」（RBB）から発売された、計4枚のDVD版である。本稿では、この史劇の概要を整理・要約し、若干の補足と考察を加えたい。

第1話は「到着 *Die Ankunft*」。1688年、フランスを逃れたユグノーたちの一団が、ブランデンブルク選帝侯国の首都ベルリンに到着する。そこには、長靴下職人のシャルル・アブラーム・ロラン *Charles Abraham Laurent*、その妻アンヌ *Anne*、息子のフレデリック *Frédéric* とダニエル *Daniel*、娘のスザンヌ *Susanne*、また道中で夫ポール *Paul* と別離したシャルル・アブラームの義姉エレヌ・ガイヤール *Hélène Gaillard* の姿があった。ロラン家はブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム（大選帝侯）から配当された空き家に住み、そこで長靴下の製作所を営んだ。やがてエレヌの夫ポールもオランダから合流し、薬剤師として働くようになる。しかし、大選帝侯から招き寄せられたはずの彼らは、ベルリン民衆にとって嫌われ者だった。そんな中、娘のスザンヌは、難民である自分

<sup>1</sup> Uwe Otto, *Die Laurents. Der Roman einer Berliner Hugenottenfamilie*, Knauer, München 1. Januar 1981.

難民一族の「桎梏」と「訣別」  
——プロイセン・ユグノーの史劇『ロラン家』を観る——

に優しくしてくれた現地の縁飾り商人ゴットリーブ・ローデ **Gottlieb Rhode** と恋に落ちる。だが家長のシャルルは、出自の異なる両者の結婚を認めない。閉鎖的な社会を構成する外来の難民たちと、優遇された外国人を嫌悪する現地の住民たちとの間で苦しんだ彼女は、最終的に亡命者たちとの「訣別」を選ぶ。ロラン家と和解しないまま、二人はドイツ系の教会で婚礼を挙げる。その最中に舞い込んできたのは、ユグノーたちの救い主である大選帝侯の訃報だった。

第2話は「宮廷との取引 **Geschäfte mit dem Hof**」。1700年、ロラン家は亡命から12年の間に、ベルリンで実業家としての地位を確立していた。息子のフレデリックとダニエルも成長し、父親の長靴下工房で働いている。ところが長男フレデリックは、贅沢が好きな選帝侯フリードリヒ3世（のちのプロイセン王フリードリヒ1世）の宮廷と取り引きしないよう求める父の忠告に反し、王宮での舞踊劇に長靴下を提供するという注文を引き受けてしまった。この豪華な注文に応えるため、フレデリックは父の不在を狙って製造量を抑えたり、資材の購入費を勝手に金庫から引き出したりするようになる。果たして彼は父と衝突し、一家と訣別した。更に、品物を納めても宮廷から代金が支払われなかったため、フレデリックは莫大な借金を背負い、逃亡を図って逮捕されてしまう。妻マルト **Marthe** と、生まれたばかりの息子ピエール＝エルネスト **Pierre Ernest** は、家で置き去りにされていた。富裕な商人の未亡人ヴィルヘルミーネ・クラムケ **Wilhelmine Klamke** はそんな彼を見つけて、自分との結婚を見返りに彼の保釈を申し出るのだった。無論、彼女の提案には裏があった。

第3話は「遺産を巡る争い **Streit ums Erbe**」。1717年、時のプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世（兵隊王）の意を受けた兵士たちが、フランス人居留区へ巨人連隊の徴募にやって来た。兵役免除の古証文を持っていた家長シャルル・アブラームは、老体を引き摺って抗議するが、銃の暴発によって落命してしまう。次男ダニエルは父の死後、行方不明の兄フレデリックに代わって長靴下工房を継ぎ、更に事業を拡大しようと考えていた。そんな矢先、兄の再婚相手を名乗るヴィルヘルミーネが現れる。そして、ロラン家の遺産がフレデリックを介して、自分と連れ子のエーヴァルト **Ewald** の手へ渡るべきだと主張し始めた。彼女は、正統な相続人であるフレデリックの実子ピエール＝エルネストを隣のザクセン選帝侯国へ招き寄せ、実の父子を再会させる。ところが、それからベルリンへ戻ろうとしたフレデリックとピエール＝エルネストは、エーヴァルトの企みによって国境警備隊に見つかり、ピエール＝エルネストは射殺、フレデリックも撃たれて逮捕された。ヴィルヘルミーネが求めた相続裁判ではダニエルに有利な判決が下されるも、ロラン家にはフレデリックの訃報が届く。

第4話は「不揃いな兄弟 **Die ungleichen Brüder**」。1730年、ダニエルの息子ジャック **Jacques** とシャルル **Charles** は、先代と同様に工房の家族経営へ参加していた。娘のアンヌ＝ソフィー **Anne-Sophie** は、亡くなった母に代わって家計簿を管理している。長男ジャックはユグノー系薬剤師の娘マルグリット・ガイヤール **Marguerite Gaillard** と恋仲になっていたが、

死の床に就いたダニエルの希望で、父の親友だったユグノー系弁護士娘のマリアンヌ・ペルトワ **Marianne Peltois** と結婚させられる。更に、弟のシャルルもマルグリットと親密な関係になってしまう。そんな折、工場主のジャックは妻の父から、借金を取り立てるためにベルリンを離れた弟シャルルの怪しげな取引について知らされる。シャルルは道中、国外逃亡を図ったプロイセン王太子フリードリヒ（のちのプロイセン王フリードリヒ2世）から手紙を受け取っていたため、関与を疑われてオーダー河畔のキュストリーン要塞に拘禁されていたのだ。そこで彼は、王太子の逃亡を援助した青年将校ハンス・ヘルマン・フォン・カッテ **Hans Hermann von Katte** (1704-30) の処刑を目撃する。シャルルはマルグリットの義兄の助力で釈放され、マルグリットと再会する。マルグリットは、恐らくシャルルとの間に出来たと思われる子供を産もうと決意していたが、シャルルはプロイセンを去った。

第5話は「身分の相違 **Standesunterschiede**」。1740年、ハンブルクで実業家として成功したシャルルが、10年振りにベルリンを訪ねてきた。彼はマルグリットとの間に生まれた娘カトリーヌ **Catherine** と初対面し、未だ独身のマルグリットへ正式に婚約を申し込む。ところが、妻を亡くした弟ダヴィド **David** の許に身を寄せている彼女はそれを拒否し、失意のシャルルはマルグリットに贈るはずだった大切な首飾りを娘カトリーヌへ与えた。他方、ジャックの妻マリアンヌが身重の家政婦リーネ **Line** を追い出したことを知ったマルグリットは、ロラン家の主人であるジャックを非難し、リーネを助けようとするが無駄であった。物乞いで生計を立てるしかなくなった彼女は逮捕され、出産後に労働矯正施設へ収容される。ジャックは漸くリーネを引き取ろうと決意するが、精神錯乱に陥った彼女が自身の赤子を殺してしまったことをマルグリットから知らされた。後悔に暮れるジャックが訪れた礼拝集会では、新王フリードリヒ2世のシュレージエン進駐により、オーストリア継承戦争の火蓋が切って落とされたことが告知される。

第6話は「戦乱 **Kriegswirren**」。1760年、戦時中の困難にあっても、ジャックは工房を何とか維持していた。そんな折、彼の親友にして提携者であるザクセンの有力商人、フリートヘルム・ザベツキー **Friedhelm Sabetzky** が、ロラン家に客人として迎えられた。ここで、ジャックの娘ドゥニーズ **Denise** とザベツキーの息子アウグスト・ヘルマン **August Hermann** との縁談が持ち上がる。ところが、ドゥニーズはロシアの傷病兵から執拗に金銭を要求されていたところをプロイセン騎兵によって助けられ、彼に恋心を抱いていた。ジャックの息子ポール＝アンドレ **Paul-André** も、シャルルの実の娘であるカトリーヌへ思いを寄せていたが、家族の都合で別の女性と結婚させられそう。マルグリットはまたもジャックを非難するが、事態は思いがけない方向へ進むことになる。他方、情熱を抑えきれないドゥニーズは友人と一緒に、軍人たちがよく訪れるという市内のキャバレーへ赴いた。だが、時は七年戦争の真最中である。ロシア軍がベルリンへ傾れ込み、ガイヤール家の薬局もロシア兵たちの掠奪に遭う。皮肉なことに、シャルルの最愛の娘カトリーヌは、実父からの贈り物である高価な首飾りを狙われ、強盗に殺されてしまった。ロシア軍が去

難民一族の「桎梏」と「訣別」  
——プロイセン・ユグノーの史劇『ロラン家』を観る——

った後、ザベツキーの息子アウグスト・ヘルマン August Hermann が父を捜してロラン家にやって来る。他方のドゥニーズは漸く、ベルリンを凱旋する兵隊の中にあのプロイセン兵を見つけたのだった。

第7話は「ザベツキーの没落 Sabetzkys Fall」。1767年、ザベツキーは戦後の不況から影響を受け、倒産の危機に直面していた。そんな折、ジャックの弟シャルルが、ハンブルクからザベツキーの債権者の代理人として、再びベルリンへやって来る。ザベツキーの管財人は債権者たちとの和解を試みるが、かつてフリードリヒ大王の寵愛を受けていた花形の踊り子ジョヴァンナ・ガッリ Giovanna Galli も債権者の一人で、彼女との調停は難航する。他方、ガイヤール家のダヴィドはジョヴァンナとの再婚を望み、ベルリンのフランス人居留区を出て、フレリヒ Fröhlich というドイツ風の姓で暮らそうと考え始めた。結局、ザベツキーは債務不履行で逮捕され、ジャックは彼の保証人になる。しかし、大王は経験豊かな商人であるザベツキーを助けようと配慮し、保証人のジャックをポツダムサン・スーシ宮殿へ呼び寄せた。この間、ダヴィドもジョヴァンナを説得し、和解が成立して、ロラン家の財政危機は回避された。

第8話は「放縦の時代 Zeit der Liederlichkeit」。1795年、ジャック・ロランとフリートヘルム・ザベツキーとの提携関係は、彼らの孫世代に当たるテオドール・ロラン Theodore Laurent とヴィルヘルム・ザベツキー Wilhelm Sabetzky との間にも引き継がれていた。今やロラン家は、北方のスカンディナヴィアや東方のロシアにも販路を開拓しようとしている。ある日、ヴィルヘルムの妻ルート Ruth の主催する読書会で、既婚者のテオドールはジョヴァンナの娘で女優のカルラ・ガッリ Carla Galli と出逢い、恋に落ちてしまう。愛人関係を結んだテオドールは、彼女による劇団の立ち上げを支援しようとする。しかし、この計画は上手く行かず、テオドールが信心深い妻カロリーヌ Caroline へ離婚を切り出そうとしている間に、愛人カルラは姿を暗ましていた。絶望したテオドールは自殺を図ったが、醜聞を恐れた家族とヴィルヘルムによってこの未遂事件は隠蔽される。テオドールは家族と共に居留区へ戻り、禁書を印刷したために投獄された弟ピエール＝トマ Pierre-Thomas の面倒を見るのだった。

第9話は「フランス時代 Franzosenzeit」。1808年、ベルリンはナポレオン率いるフランス軍の占領下に入り、商人たちも占領軍の将兵たちと共生せざるを得なくなっていた。ナポレオンの大陸閉鎖によって、イギリスから品物を輸入することができなくなったため、ロラン家もザベツキー家も、生き残るためにフランス軍と取り引きすることを選択する。ピエール＝トマは独立して印刷業と書店業を営んでいたが、ベルリンを占領していたフランス軍の将校ブルーゼ Brouzet から決闘を申し込まれる。この決闘は兄テオドールの家に寄宿していたフランス軍将校ガストン・ヴィヨーム Gaston Villaume によって土壇場で阻止され、テオドールの妹アンヌ＝アントワネット Anne-Antoinette はこの将校と恋に落ちる。その頃、神学校で学生叛乱が起こり、テオドールの末っ子アルベール Albert は、叔父であるピエール＝トマの許に身を寄せた。ピエール＝トマは、今度は反仏的な文献を隠し

持っていたことで逮捕の危機に晒されるが、薬剤師のフォン・クランツ von Crantz とその娘シャルロッテ Charlotte、そして自らの甥アルベールの助けを借りて、ベルリンからの脱出に成功する。やがてフランス軍が撤退する展開になると、アンヌ＝アントワネットは婚約者のヴィヨームと共にフランスへ渡った。この間、プロイセン近代化改革の一環であるフランス人居留区の特権廃止を巡って、フランス改革派教会の役員会は荒れていた。結局、プロイセン王国内のユグノーたちは既存の特権を剥奪され、他の臣民たちと法的に統合されることとなった。

第 10 話は「僕が思う自由 Freiheit, die ich meine」<sup>2</sup>。1819 年、アルベールは結婚して、ベルリン大学の哲学講師になっていた。彼は義父母からの経済的な自立、また学者としての栄達を念頭に、正教授への昇進を目指す。アルベールは妻になったシャルロッテ、そして 2 人の幼い子供たちと共に、慎ましく暮らしていた。時はヴィーン体制期、変革後の揺り戻しの時代だった。ある日の講義のこと、急進派の学生カール・ルートヴィヒ・ザント Karl Ludwig Sand (1795~1820) による作家アウグスト・フォン・コッツェブー (1761~1819) の暗殺事件に触れた彼は、その自由主義的な立場を鮮明にした。この結果、彼は大学から解雇され、危険分子として官憲に逮捕される。父テオドールの事業を継いでいた兄のフィリップ Philippe は、反体制的な弟を援助しなかった。結局告訴はされなかったものの、ドイツ諸邦の大学に再就職できる見込みは無い。遂に、彼は妻や子と共に自由な土地を求めて、かつて祖先が迫害されていたフランスへ渡るのであった。こうして、百年以上に及ぶ長き亡命の物語は幕を閉じる。

以上のような本作の内容には、17 世紀末から 19 世紀初頭までのブランデンブルク＝プロイセンの歴史を彩った、諸々の事件が絡んでくる。ただし、ユグノーたちを庇護したホーエンツォラーン家の歴代君主たちについては、物語の過程で何度か言及されるものの、本人たちが登場することはほぼ皆無である。ロラン家の商売に最も関与したフリードリヒ大王ですら、作中で顔を見せることはない。庭園の奥で杖を曳きながらロラン家の主人を迎える軍服姿の人物が、大王の姿を暗示するのみである。出来るだけ実在した人物を登場させないのは、本作が一時代に生きた市民たちの物語であること、あるいは史実に取材した虚構であることを意識させるための演出なのかもしれない。その意味で、本作は史実に即して展開する歴史小説というより、過去という舞台背景を借りた時代小説に近いと言えるだろう。

本作が放送されたのは、1981 年のことである。「経済の奇蹟 Wirtschaftswunder」と呼ばれる飛躍的な戦後復興を経た西ドイツには、「客人労働者 Gastarbeiter」と総称される外国

---

<sup>2</sup> これは、同時代のプロイセンの詩人マクシミリアン・フォン・シェンケンドルフ Maximilian von Schenkendorf (1783-1817) によって創作された、同名の愛国詩を意識したものだろう。この詩はナポレオン戦争の機会に作られたものだったが、やがて福音派牧師カール・アウグスト・グロース Karl August Groos (1789-1861) によって旋律を施され、ドイツ語の民謡として長く親しまれた。

難民一族の「桎梏」と「訣別」  
——プロイセン・ユグノーの史劇『ロラン家』を観る——

人たちが、主にトルコ、ユーゴスラヴィア、イタリアなどから流入していた。石油危機に伴う景気低迷を受けて、1973年に彼らの新規募集が停止されると、帰国すれば再び労働者として西ドイツへ戻る機会を絶たれると思った人々が、却って西ドイツに留まり、家族を呼び寄せることがしばしばとなる。果たして、1980年には外国人の割合が西ドイツの人口の7%以上を占め、80年代にも同程度の比率を保ったのだった。彼らがやがて故国へ帰る「客人」ではなくなり、定住を前提とする事実上の「移民」となれば、外国人の「統合」が問題とされるのは当然の成り行きである<sup>3</sup>。事実、1985年、ナント勅令撤回とポツダム勅令発布の三百周年を記念する論集の中で、歴史家のエティエンヌ・フランソワは、『ロラン家』が史実の細部において多くの誤りを含みつつも、移民・難民統合の困難を描いた作品であるとの解釈を披露している<sup>4</sup>。

しかしながら、本作をつぶさに鑑賞してみれば、統合問題は物語の一側面に過ぎないことが浮かび上がってくる。事実、外来の難民と土着の住民との対立という問題は、亡命第三世代までを描く物語前半の中心要素に過ぎない。むしろ物語全体のテーマとして読み取られるべきは、特定の出自や宗派に基づく共同体の「桎梏」と、個人の恋愛や野心や思想を動因とした「訣別」であろう。ここでは、受け入れ先社会からの統合圧力に対抗する共同体、また定着先で社会的地位を固めようとする家族の「団結」は、個を束縛する負の因子となる。他方で、多数派への「統合」は、却って窮屈な少数派の共同体から抜け出すための逃げ道にもなり得たのである。多数派社会からの働きかけに対して、ある人が属する少数派集団の紐帯を維持することが、必ずしもその人の幸福に繋がるわけではない。一見すれば共同体の命運をしかと背負っているように思われる家長も、紐帯を脅かしかねない個人的欲求を内に抱えていた。また、本作で共同体からの「訣別」を選択した人間が、決して幸せな結末を迎えたわけでもない。なるほど、これらの群像は、個人主義的な時代精神を反映しているという意味で、一時代の産物ではあるだろう。しかしながら本作は、有り得たかもしれない難民一族の姿を通じて、両義的で複合的な過去の語りを提供している。このように考えるならば、DVDの包装表紙にある夫婦の姿も、また違った意味をもって見えてこないだろうか。

(京都大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC1)

<sup>3</sup> クラウス・J・バーデ／ヨッヘン・オルトマー（増谷英樹・前田直子訳）「ドイツー流動的な境界と移動する人々」クラウス・J・バーデ編『移民のヨーロッパ史ードイツ・オーストリア・スイスー』東京外国語大学出版会、2021年、138-143頁。

<sup>4</sup> Etienne Francois, „Vom preußischen Patrioten zum besten Deutschen“, in: Rudolf von Thadden und Michelle Magdalaine (hrsg.), *Die Hugenotten 1685-1985*, C.H.Beck, München 1985, S. 211-212.